

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

留学生活の終わりに、「ぼく」は滞在していた南ドイツのチェーペンゲンから北ドイツを通り、デンマークに向かう旅行に出た。「ぼく」はドムビエールで車を降り、バスに乗り込もうとしている。

ぼくの最初の目的地は、観光地として名高いローテンブルクという小さな町であった。ここは古い中世の城壁を今も完全に残しており、戦争中に爆撃で大きな被害を受けたが、その後、I 昔のままに修復されているという。旅の初めに、この古い町を一目見ておきたかった。なにより高校時代に訪ねた、^aむかしドイツでぼくの父母と交際があった夫人が言っていたが、母はこの町がもつとも気に入っていたという話ではなかったか。

汽車の連絡の都合で、ここからバスで行けと教えられてきた。先ほどの糞はII 雨になっていたが、勢いよく斜めに吹きつけてくる。幸い、バスはすぐに来た。

途中のバス停で、頭に頭巾のようにネックチーフをかぶった、もの凄く肥満したおぼさんが両手に荷物を下げて乗りこんできて、大声で、

「やれ、やれ！」

と言った。

それから通路を歩こうとしたが、III 肥満しているのと両手に下げた荷物のため、体がかえて進めない。彼女は体を横にして通路を歩き、やつと空の座席（狭い席にその肥りすぎた体がおさまったのは、なんだか奇蹟のように思われた）につくと、また大声で、

「やれ、やれ！」

と言った。

ぼくの横にかけていた二十歳くらいの、痩せぎすの、そばかすのあるちよつと可愛い娘さんがぐすくすと笑った。

三十分ほどで夕刻、ローテンブルクの駅に着いた。ほんの小さな駅である。雨がなお激しく降っているため、みんなはタクシーを待っているが、そのタクシーも二台くらいしかないらしく、しかし小さな町のため、さして時間をおかずにまた戻ってくる。

ぼくも数名の客にまじって立っていると、十三、四くらいの、見すばらしい^{かっこ}嗜好の少年がそばによつてきて、煙草

と言った。

ぼくは一本を与えた。少年はべつに礼も言わずにそれを受け取り、ポケットに入れて去つていった。すると、ぼくのうしろにいた、実直そうな老人が、子供に煙草をやつたりしてはいけない、^bとしかつめらしく注意した。

「すみません」

と、ぼくは頭を下げて言った。それくらいなら、あの子に直接小言を言えよいいのに、と内心思いながら。

そこにタクシーがきた。乗りこんで行先を告げると、運転手はうなずき、次に人なつこい声でこう言った。

「冬がきましたねえ」その言葉はちよつと気が重くなつていたぼくの心を和ませた。

「ほんとうにね」とぼくは答へ、この運転手さんには少しチップを余分にあげよう、と考えた。

この旅行のため、IV 便約して金を貯めていたので、かなり余裕のある旅はできるはずであった。

ここは観光地だから、念のためホテルを予約しておいたが、^b着いてみるとその必要もないことがわかった。階/C段も廊下もほとんど電気がつけられていない。案内された二階には、泊り客も稀であるらしく、もつと薄暗く、古めかしいホテルは化け物屋敷の^cカンがあった。

部屋にはほどよく暖房が通っていたが、V窓をあけてみると、夜が訪れた小路に雨が降りしきるのが見え、かなりの寒気がおし寄せてきた。

裏地をつけたレイン・コートと、ぶ厚いセーターのたぐいは持つてきたが、この天候と、このあと旅する予定の北方の地を考えると、いくらか心配にもなってきた。

VI

くすんだ墓石と木立のあいだを、長いことさ迷っていたようであった。道は迷路のように錯綜し、どこをどういうふうに行ったものかわからなかった。夕暮というより、夜がもくもくと四方八方から忍び寄ってきていた。ぼくは物心のつくまえに亡くなった兄たちの墓をさがしているようだったが、そんなものは一向に見当らなかつた。のみならず、すでに夜がすつぽりとぼくを包みこんでいて、同時にひややかな手がぼくを奈落へ引きずりこもうとするのだった。

恐怖の情に、思わずぼくは目を覚まし、ベッドのなかでひとりこちた。

「あれは夜の手だったのだな」

すると、恐怖の念はたちまち消え、むしろなじみぶかい親愛感のようなものを感じながら、ぼくはその夢を反芻した。

「ぼくの幼年期はVIIと親しかったのだ」

すると、松本の寒気に閉ざされた夜のことなどが思いだされてきた。あのころ、ぼくは一種の離人症かノイローゼ状態で、行方も知らず、突風の吹く闇のなかを徒らにさ迷ったりしたものだ。

「あのころも、死に近かった」

意識的に死のことを考えたのは、大学にはいり、創作のようなものを書きだした時分であつたろう。当時、ぼくは偶然にもぼくの生れた年に自殺した日本作家の晩年の作を繰り返し読み、しょっちゅう自殺のことを考えていた。たとえそれが青年期の甘ったるい錯覚だつたとはいえ、そしてそれだけになおいつそう、ぼくはシヨウペンハウエルの本などにものめりこんでいったのだつた。

そうした暗い思念から離れようとして、ぼくは輝く陽光の下のチロルの山々のことを思いだしてみた。また信州の残雪に彩られた山々の景観をも。

「山と虫―つまり自然は、ぼくに生気を吹きこんでくれたものだった」

その交わった地点で、ぼくは自分自身をよりよく具現した作品を書けるのではあるまいか。

「それにしても、ぼくはまだ何にも創っていないのと同じなのだ」

それは憂鬱な想念だつた。

ぼくはしばらく闇のなかに目をこらしていた。闇はあくまでゆらぎもせず、ただ④戸外で降る雨の音が⑤間断なく伝わってきた。永久に降りつづけるのではないかと危惧されるまで……。

(北杜夫『木精』による。一部改変)

注1 離人症 神経症や精神病初期などに現れる異常心理で、自分自身の思考や行動・身体・外界に対して現実感を喪失した状態。

2 ショウペンハウエル ドイツの哲学者。厭世思想の代表者とされる。

問一 二重傍線部①②③④⑤の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

問一 二重傍線部②にあてはまる最も適当な漢字をア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 看 イ 勘 ウ 感 エ 館 オ 観

問二 傍線部 a は、どの語句を修飾しているか、最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 訪ねた イ 言っていた ウ 交際のあつた
エ 気に入っていた オ 話ではなかったか

問三 傍線部 b の意味として最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 威厳をもって イ 軽蔑して ウ しかめつらをして
エ 不機嫌に オ まじめくさつて

問四 傍線部 c と同じ意味で「徒」という漢字を用いている熟語をア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 徒手 イ 徒弟 ウ 徒党 エ 徒歩 オ 徒勞

問五 空欄 I ～ V に入る語の最も適当な組みあわせを、ア～オから選び、符号で答えなさい。

ア I ずっと II ちよつと III ほとんど IV まつたく V もう
イ I ちよつと II ほとんど III まつたく IV もう V あまりに
ウ I ほとんど II まつたく III もう IV あまりに V ずっと
エ I まつたく II もう III あまりに IV ずっと V ちよつと
オ I もう II あまりに III ずっと IV ちよつと V ほとんど

問六 時刻はどのように変化しているか、最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 早朝から夕方 イ 真昼から夕方 ウ 朝から深夜
エ 午後から深夜 オ 深夜から明け方

問七 波線部 A は、どのような気持ちの表れと思うか、最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 悪天候にうんざりしている。
イ 狭い通路を窮屈に感じている。
ウ やつとバスに乗れてほつとしてしている。
エ 重い荷物を抱えた自分を元気づけている。
オ 乗ったバスが混雑しているのがっかりしている。

問八 波線部 B で「ぼく」は、どこに着いたのか。最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

ア 信州 イ チロル ウ ドムビエール エ ホテル オ ローテンブルク

問十 波線部Cの理由として最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア また十分に明るいから
- イ 古いホテルなので設備がないから
- ウ その日の泊まり客がほとんどいないから
- エ 中世の趣をのこした歴史的な観光地だから
- オ ホテルとは名ばかりの化け物屋敷のような建物だから

問十一 空欄Ⅵに入る最も適当な文をア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア その夜、ぼくはまた夢を見た。
- イ その瞬間、ぼくは思い出したのだ。
- ウ 思いがけない寒気がぼくをたじろがせた。
- エ ぼくはいつとなく立ち上がって窓を開けた。
- オ ぼくは降りしきる雪の中あてもなく歩いてみたくなった。

問十二 空欄Ⅶに入る最も適当な語は何か、最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア 闇 イ 死 ウ 墓 エ 夢 オ 夜

問十三 波線部Dの内容として最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア 見知らぬ異国にある孤独感
- イ 死に親しんでいた時代の回想
- ウ 思うような作品を書けないあせり
- エ 苦しみに満ちた世界に対する絶望
- オ これから訪れる北方の地へのおそれ

問十四 「ぼく」は高校時代に何をしたか、最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア ドイツを訪れた。
- イ 創作を試みていた。
- ウ 両親の古い知り合いを訪ねた。
- エ 亡き兄の墓をさがす夢ばかり見ていた。
- オ 自殺した作家の作品を繰り返し読んでいた。

問十五 「ぼく」はどのような人物か、最もふさわしいものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア 才能の不足に絶望し、死を意識している作家
- イ いくつかの作品を発表し注目を集めている新進作家
- ウ ヨーロッパの名所を取材のため訪れたベテランの作家
- エ 自分自身を表現した作品を書きたいと思っている作家志望者
- オ 創作の経験もないのに作家になろうと思っている夢想的な若者

問十六 問題文の内容に合うものをア～オから選び、符号で答えなさい。

- ア 夜の闇と寒気は、「ぼく」の記憶を呼び起こした。
- イ 荒廃したホテルに、「ぼく」は懐かしさを感じた。
- ウ 「ぼく」は恋人の面影を訪ねてローテングルクを訪れた。
- エ 「ぼく」は幼年時代に生死に関わる重病にかかっていた。
- オ 「ぼく」は兄の死によって死を身近に感じるようになった。

問十七 問題文について書かれた次の文章の空白部に入る語句を選んで符号で答えなさい。

① 駅でバスを降りた「ぼく」はタクシーを待っている。ほかの乗客がどうしたか、はっきりと書かれていないが、② とあるので「ぼく」を含めて数名が降りたとも考えられる。だが、二台くらいの③ が「さして時間をおかずにまた戻ってくる」ということを知るためには往復を何度か目撃し、同じ車が行ったり来たりしているのを観察しなくてはならない。十人ぐらいは降りた可能性もある。「ぼく」がドムビュールから乗り込んだバスは、④ が空の座席にたどり着くまで⑤ 通路を歩かなくてはならないほど混んでいたのだから、もともと大勢の乗客が降りたかもしれない。

- | | |
|------------------|---------------|
| ア ぼくのうしろにいた | イ 数名の客にまじって |
| ウ みんなはタクシーを待っている | エ 汽車 |
| オ バス | カ タクシー |
| キ チュービングン | ク ドムビュール |
| ケ ローテングルク | コ 実直そうな老人 |
| サ 肥満したおばさん | シ みすばらしい格好の少年 |
| ス 体を横にして | セ 両手に荷物を下げ |
| ソ ちょっと気が重くなって | |

二 次の問いに答えなさい。

問一 ①～⑤の傍線部のカタカナに該当する漢字を、それぞれア～オから一つずつ選び、符号で答えなさい。

- ① コメントをスライドにウツす。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア 写 | イ 撮 | ウ 移 | エ 録 | オ 映 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
- ② 私の後任に彼をススめる。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア 薦 | イ 興 | ウ 進 | エ 推 | オ 勧 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
- ③ 会社の役員をツトめる。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア 務 | イ 勤 | ウ 就 | エ 勉 | オ 努 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
- ④ 情報共有の必要性をトク。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア 問 | イ 得 | ウ 徳 | エ 解 | オ 説 |
|-----|-----|-----|-----|-----|
- ⑤ アツい思いがこみ上げてくる。
- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ア 篤 | イ 厚 | ウ 暑 | エ 熱 | オ 温 |
|-----|-----|-----|-----|-----|

問一 傍線部のカタカナを漢字で書いた時、①～⑤と同じ漢字を用いるものを、それぞれア～オから一つずつ選び、符号で答えなさい。

- ① イシの疎通がうまくいかない。
 ア シジツをもとにした小説を読む。
 イ 彼は上昇シコウが強い。
 ウ 両親のシシツを受け継ぐ。
 エ シリヨに欠けた発言を反省する。
 オ 最新の技術をクシする。
- ② ノウムの影響で高速道路が通行止めになる。
 ア 新しい環境にジユンノウする。
 イ ノウベンな人がうらやましい。
 ウ 会費をタイノウしている。
 エ 名案がノウリにひらめく。
 オ ノウシユクしたアドウジユース。
- ③ ヘインの努力が実る。
 ア 部外者の入場をソシする。
 イ 野球選手としてのソシツを見抜く。
 ウ 来場者にソシナを渡す。
 エ 引っ越してソエンになる。
 オ 名誉毀損でコクソする。
- ④ どのような時も彼はユウ然としている。
 ア ユウキユウの歴史。
 イ 新聞のユウカンを読む。
 ウ ユウガな生活を送っている。
 エ 一生をサユウするような出来事。
 オ コユウの性質を明らかにする。
- ⑤ 徴兵をキヒする。
 ア チームのキジクとして活躍する。
 イ キンキを破つて非難される。
 ウ キヒンセキに案内する。
 エ カイキを延長してさらに検討する。
 オ キセイヒンを購入する。

問二 ①②の傍線部の漢字と異なる読み方をするものを、それぞれア～エから一つずつ選び、符号で答えなさい。

- ① 校内一の実力と言っても過言ではない。
 ア 言語道断の行い。
 イ 悪口雑言を浴びせる。
 ウ 言論の自由を守る。
 エ 無言でうなづく。

- ② 勝利を確信して会心の笑みを浮かべる。
 ア 知人を見つけて会釈する。
 イ 出品作の審査結果を照会する。
 ウ 役割分担を確認して散会した。
 エ 友人に誘われて茶会に行く。

問四 ①～④の空欄に入る四字熟語を、それぞれア～エから一つずつ選び、符号で答えなさい。

- ① にとらわれて大事なことを見失う。
 ア 仕様未設 イ 枝葉末節 ウ 止揚末説 エ 私用抹切
- ② 事態を打開するための策をする。
 ア 案中模策 イ 暗中模策 ウ 案中模索 エ 暗中模索
- ③ 議長としの立場を貫く。
 ア 不偏不党 イ 不變不当 ウ 普遍不倒 エ 付刃不等
- ④ には解決できない問題だ。
 ア 一丁一席 イ 一鳥一石 ウ 一朝一夕 エ 一張一雙

問五 ①～④のカタカナ語と同じ意味の熟語を、あとのア～オから一つずつ選び、符号で答えなさい。

- ① パラドックス ② メタファー ③ ロジック ④ マイノリティー
- ア 論理 イ 少数派 ウ 過程 エ 倫理 オ 暗喩
- カ 多数派 キ 逆説 ク 直喩